

1995年8月23日-27日に

インドネシアのトバ湖 (スマトラ島) に旅

行にきましたので紹介します。

クアラルンプールからインドネシアのメダン (スマトラ島) まで飛行機で1時間弱。そこからトバ湖までがきついきついバス旅行。バスといっても、11人乗りほどのワゴン車。旅行者は私たち2人だけ。あとは地元の人たち。ぎゅうぎゅうに17人も詰め込んで発車オーライ。もっとすごいバスは、ダッシュボードにも腰掛けさせていました。エアコンは無し。



運転がこれまたすごくて、クラクション鳴りっぱなし。道は、どうにか2車線の細い道。トバ湖に向かう車は、車間距離がろうじて1台分の状態で数珠つなぎ。対向車はそれより少ないのですが、お互いとんでもないスピードです。そこでがんがん追い越しをします。「うわ～死んじゃう！」と目をつぶったことが何回もありました。実際、行く途中悲惨な事故現場 (血だらけの人が車内にいた!) を目撃してしまいました。



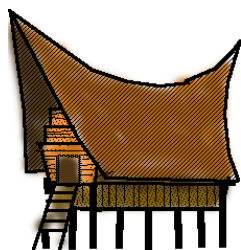
予定4～5時間のところ、この運転手は3時間半で目的地までつれていってくれました。標高900mのどでかいカルデラ湖まで道のりおよそ200kmのバス代1人7,000Rp (280円ほど)。何よりこの日疲れたのはインドネシア語・マレー語・英語混ぜ混ぜでの運転手との料金などの交渉でした。

2日目

琵琶湖の2倍以上もあるトバ湖の真ん中に浮かぶサモシール島に上陸。結構大きい島で、ぐるり130kmほど。とりあえず地元の人と一緒に1人700Rp払って船で島まで。

さてそこが大変。島を周回しているミニバスを乗り継いで島の裏側の温泉まで・・・but 橋が落ちていてバスから降ろされる羽目に。落ちた橋を歩いて渡って、向こう岸でまた別なバスに乗れと・・・1度降りるとなかなか来ないバス。来ても鈴なり、乗れる場所は屋根の上だというバス。すいていると満員になるまで発車しないバス。そんなバスを乗り継ぎ乗り継ぎ、何とか目的達成。そのまま入るにはちょっと熱めの温泉で、地元の人より観光客専門のようでした。バスを拾い拾い、船着き場に戻るのも一苦労。

相変わらず荒いバスの運転。でも、その窓から見た景色はすばらしいものでした。雄大な高原の風景。鋏を手に畑で働く村人。それを手伝う子供たち。のんびりと水浴びをしたり草を食べる水牛。あちらこちらにある小さなキリスト教会。(島の人口のほとんどがキリスト教徒) 道沿いにある村の、バタック民族の昔ながらの家屋群。



その家で普通に暮らす村人。とてもすてきでバスの中から写真を撮りまくっていました。

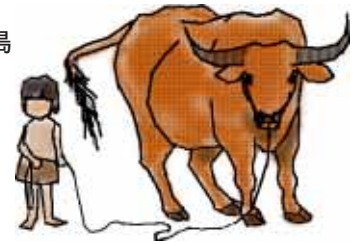
お墓がまた変わっていて、この民家を模したものが多くありました。家族が死ぬと、まず小さなお墓に埋められて、5年後に骨を掘り出して民家型のお墓に納めるのだそうです。

夕方、6時半の最終便に乗ってホテルへ。出航を待つ船の脇で、村の人たちは、洗濯したり体を洗っていたりしていました。次ページへつづく・・・



3 日目。

島が気に入ったので、また上陸。今日はサイクリング。島で見たものを紹介します。島には、いたるところに水牛。その図体のでかいことのでかいこと。それを小さな子供が綱を引いて歩いていました。たいていの子供が裸足。島のあちこちに小さい学校があり、学校に行くときには制服に靴を履いていました。学校の小さな校庭にも水牛がいて、子供も水牛もそれが当たり前のように、それぞれ草を食べていたりボール遊びをしていたり・・・



とっても、のどかな風景でした。

原っぱの所々に大きな穴。何かと思いきや、水牛の泥浴び場でした。

ちょうど一頭がドボンとつかる大きさ。どっ

ぷり首までつかっている様子は、まるでどでかい水牛の顔が地面に生えているといった具合。



わずかにある湖岸の平らな所は水田で、少しなだらかな土地は段々畑になっていました。女の

人は、水瓶はもちろん、こんな鋤も頭の上のせて歩いて



ていました。遊んでいる子供もたくさんいましたが、家族と一緒にお手伝いをする子供たちもたくさん見かけました。水牛の世話。畑で、親と一緒に畑を耕す（トラクターや耕運機は、もちろんありません）。おばあさんのまねをして、ほうきで掃いているつもりの3歳ぐらいのちびちゃん。赤ちゃんを子守する子供たち。日本ではもう失われてしまったものが残っている気がしました。

子守は女の子の仕事。それぞれ赤ちゃんを背負いながら遊んでいる姿をよく見かけました。こんなわっかに縫った布を、肩に通して、赤ちゃんを背負うーというより、無造作にぼろんと入れて抱えているといった感じ。首のすわらない生まれたての赤ちゃんも、ぼろっと入れてぷらんとぶらさげていました。赤ちゃんにとっては、居心地が悪いんじゃないかしらと思いましたが、何



てことなくくると

丸まってすやすや寝ていました。脇やおなかの上あたりに抱えるほか、背中にぶらんと背負っているお母さんもいました。

夕方、棧橋の一角では洗濯、水浴び。洗濯は女性の仕事。膝の上まで水につかったまま。すすぎは、くるりと向きを変えて湖の水で。その隣では髪を洗う女性。男性は、パンツ1枚。全身泡だらけになると、湖にザバザバ。何度か頭まで潜って、あとはすたすた帰っていきました。子供たちは、すっぽんぽんで水遊び。いつまでもいつまでも、ジャボンジャボンと飛び込んで遊んでいました。もうちょっと先には、なべを洗う人。みんな一緒に湖で、です。



船の上で出航を待っていると、ビニール袋をぶら下げた子供たちが登場。ビニールの中には、何やら新聞紙に包まれたものがいくつか。「ピーナッツ、いるか?」「いらぬ、いらぬ。」次の子供たちが「ゆでたまごは?」「いらぬ、いらぬ。」そして、サンダルを履いている私に向かって「靴、磨くか?」

そんな、子供たちの攻撃をかわしているうちに、出航。島を離れてしばらく・・・突然、ドボン! 裸のまま隠れていた子供たちが湖へ・・・こんな所から泳いで帰れるのかしら、というこちらの心配をよそに、水の中から手を振っていました。

4, 5 日目もいろいろ面白い体験をしましたがこれで終わり。ちゃんちゃん

もどる

次へいく